教科又は教職に関する科目，教育実践研究Ⅰ（教育問題）

小集団の議論から始まる主体的な学びの授業

附属教育実践総合センター・太田佳光

１、本授業のねらいと概要

本授業は、３回生後期に開講する教職に関する選択科目である。教育実習を終え、教師になる事を希望する意欲の高い学生の受講が多い。そのため、教職に就いた時に実践的で役に立つ授業内容を提供したいと、これまで試行を繰り返してきた。知識としての教職教養は、いざ現場でその立場に立つと役立たない事が多いと指摘されている。その一つの要因は、与えられた知識を本当に自分のものとしていない事が考えられる。学生たちは、ともすれば、絶対の正解を求め、いわばマニュアル化した指導法などに傾きがちである。そのことは、他の授業でも強く感じることである。

そのため、本授業の特色は、学生がさまざまな教育実践上の課題を主体的にとらえ、その対応策を、教師になった自分自身の問題として考えることや具体的な対応策を取れる事を主としている。逸脱やいじめなどの問題を実際の事例を中心に提示し、その対応について具体的に考察することとしている。あえて、正解を示すことをせず（もっとも、こうした問題に絶対の正解はないのだが)、自分の考え方を確立することを、最も重要なねらいとした。そうすることによって、より実態に応じた実践的な対応が可能になると考えるからである。なお、本年度の受講生数は、昨年より多い４４名であった。

本学部のディプロマ・ポリシーとの関連では、「教育をめぐるさまざまな現代的課題について論じ、適切な対応を考えることができる。」に、主として関わる。

授業概要は以下の通りである。なお、シラバスに掲載した内容を、実際の授業においては、大幅な変更を加えた。それは、授業の工夫で述べるように、一つの課題を徹底的に考え、丁寧に議論することにより、自分のものとする事を目指したからである。

その結果、事例は、逸脱に関するものが２事例、いじめに関するものが１事例を取り上げることとなった。

①教育問題の現状と課題
②授業妨害と逸脱（1）ある事例の検討
③授業妨害と逸脱（２）対応策の検討
④逸脱行動と立ち直り（１）ある事例の検討から
⑤逸脱行動と立ち直り（２）対応策の検討
⑥逸脱行動の現状と課題：教師の役割と逸脱論
⑦第１回から第６回までの補足説明（授業の進み方により、第６回の内容が入ることもあるため）
⑧いじめ問題と教師（１）ある事例の検討から
⑨いじめ問題と教師（２）対応策の検討
⑩いじめ問題と学級集団（１）ある事例の検討
⑪いじめ問題と学級集団（２）対応策の検討
⑫いじめと学級づくり（１）いじめが起きない学級づくりとは
⑬いじめと学級づくり（２）集団を意識した学級づくり
⑭いじめと学級づくり（３）：人間関係を意識した学級づくり
⑮総括的討論

２、本年度の授業の工夫

小グループによる討論と全体討議で、これまで、おおむね良好な評価を得ている本授業であるが、さらにより良い授業展開を工夫した。

これまで、小グループによる討論と全体討議を、授業内容の進展とからめ、やや性急に行ってきた感がある。そこで、本年度は、小グループによる話し合いとまとめを、より丁寧に行い、さらに、全体での討議も、すべてのグループ（６グループ）による発表として、質疑応答もより細やかに時間をかけて行う事とした。

具体的には、授業者による問題提起（実践資料やビデオ映像を使用した問題場面の提示）の後、小グループによる話し合いを行い、そのまとめをＡ４用紙にさせた。そして翌週の授業で、小グループによる発表、その後の討論という流れで行った。本年度は、それぞれ９０分を使った小グループによる討論と全体討議により、学生たちの思考の深まりを、さらに一層重視した授業を企図したのである。

なお、例年取り組んでいる授業の工夫として、

授業の双方向性をあげることが出来る。すなわち、双方向的授業を実践するために、数年前から「大福帳」というＡ４版の出席カードを使用している。「大福帳」には、１５回分のコメント記入欄が設けられ、毎回授業終了後に、授業への感想や質問などを学生が記入し、次回授業時に学生に返却するものである。この出席カードの使用により、授業時に学生がどのようなことを考えているかを知ることができ、次回の授業にその内容を生かすことが可能となる。また、学生の質問などに個別に対応できるため、より細やかな指導が可能となると言えよう。

３、学生による授業評価の概要

昨年と同じく、授業終了時に、学生に対して「無記名」のアンケート調査を実施した。なお、実施の際には、次年度の授業改善に用いることを確認した。また、提出場所は、教員の目が届かない、教室前方隅の机を指示し、無記名であるが、なお学生の本音の評価を得られるよう配慮した。そして、受講学生４４名全員からの回答を得た。（補足すると、本授業への出席率は非常に高かった。）

アンケートの概要については、本年度も自由記述方式を用いた。数量的評価を用いなかったのは、本アンケートを今後の授業改善への一助としたい思いが強かったからである。（自由記述による、より詳細な感想や要望を中心として知りたかったから）。

以下、学生たちの、評価点、課題点、感想などを含んだ自由記述を示したい。

「今回話し合い活動を昨年度よりも多く取り入れて下さったということですが、私にとってこの講義はとても学びの多い授業でした。毎週、月曜２限が楽しみで、様々な意見にふれることや、物事を多面的にとらえることができ、魅力的な講義でした。事例から対応を考えて行くというのは、実際に現場に出てからも必要となると思うので、とても学びにつながりました。」

「とても良い学びができました。ありがとうございました。意図的に話し合いの時間を多く取ったとの事でしたが、来年度もその方針でいくと良いと思います。議論し、考える力がなければならないと思うからです。しかしながら、グループ相互での深い議論は少し乏しかったように思います。もっともっと、相互のグループでつっこんだ議論ができればと思います。」

「授業を受けて、こんなに毎時間話し合う授業は、ほぼ初めてだったので、とても新鮮だった。実習を終えて教育現場を体験した人たちと話し合うことができたので、より深く問題について話し合えたので良かった。ただ、取り上げたビデオの事例などが少し古いものだったので、現在では、対策やケースが少し違うのかなと思った。

いじめや非行など、自分が実際に教師になると直面するであろう問題について考え、実際の現場でのその後の対応や結果を知ることができ、とても勉強になった。」

「討論の回数がとても多かったため、普段は聞く事のできない人の意見をたくさん聞くことができました。様々な意見を聞くなかで、自分自身の考え方を改めて考えるきっかけになりました。答えがしっかり出るという授業ではなかったのですが、いじめは答えが出るものでもないと思うので、この授業を思い出しながら良い教師になりたいです。」

「ディスッカション中心の講義で、他の人の意見をたくさん取り入れることができて、とてもいい経験になりました。対策に絶対の正解というのはない事は何となく感じていたことなので、それは、これから現場に出て実際にそういう場面に出会ったときに、少しでも意欲的に取り組んで経験を積んでいこうと思いました。」

「この授業の良かった点は、自分たちで討論する時間が多かったので、自分たちで納得のいかない点をしっかり議論することができた。また、自分たちで問題や課題を見つける力が身についた。改善点は、新しい価値や議論していることが正しいのかの判断が分からないことである。」

「具体的な事例を通して自分なりの考えを出すことができた。いじめや集団などの理論の提供もあった。また、大副帳が、普通の感想カードと違って書きやすかった。ただ、いつも同じような人が発言していたので、毎回違う人になるような工夫を私たちがするべきだった。」

学生たちの授業評価からは、討論による学びに対する評価が多かった。また、絶対の正解がないことにも、ある程度の理解を示してくれたと思う。ただ、もう少し、基本的な方向性は示す必要はあると思った。ただ、なによりも、主体的な学びが出来たこと、そのことに意義を見出してくれた学生が多くいた事に、授業者として強い喜びを感じた。毎回真剣勝負のような気持ちで講義を展開していたことが報われたような気がする。さらに、深く突っ込んだ議論の必要性や資料の問題など、課題とされたことも考え合わせ、今後、より質の高い授業として展開したいと思う。その動機付けを、学生たちの授業評価から得られた事に感謝したい。